

# 登別の良さを発信するためには、 登別の人とモノとコトを知らなくては！ 「登別市民よりも市民になる」を 目指しています

## 増田 好希 (ますだ よしき) さん

1996年茨城県筑西市生まれ。学生時代は、高専の物質工学科でiPS細胞をテーマに研究する。卒業後は、プログラミングへの興味からIT業界へ転身。上京して、ITベンチャーで事業の立ち上げを4年間経験。スキルアップのため、国内大手IT企業のSEへ転職。仕事のAI化をきっかけにIT業界から離れ、現在は登別市の地域おこし協力隊として活動中。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。29回目となる今回は、登別市で地域おこし協力隊として地場産品等PRマネージャーを担いながら、漁師さんの手伝い、ビーチクリーン活動、小中高校での講演、町内会のお手伝いなどを楽しく行っている、増田好希さんです。

### 登別に来るきっかけを教えてください

首都圏でSEをし、仕事でAIを使う中で「あれ？どこかのタイミングで、自分もAIにとって代わられるな」と感じたのです。それもそう遠くない未来に。「じゃあ、早く逃げなくては！AIに凌駕りようがされない真逆な世界を探そう。それはきっと原始的なことなのではない



か」。当時、ジビエが好きだったこともあり、デジタル世界から遠いのが狩猟ではないかと気が付きました。友人たちに「ジビエとハンターをやりたい」と話していたら、その一人から「登別市で地域おこし協力隊員を探している。ハンターのサポートや一次製品のPRが出来そうだよ」と連絡が。迷わず応募し今に至ります。初めての北海道が面接のためだったのです。

### 「地場産品等PRマネージャー」の仕事内容は？

農家さん、漁師さん、猟友会の皆さんと連携して、登別市の一次製品のPR動画の作成がメインです。その一次製品のPRを進める中で、地元の人が地域の魅力ある製品のことを意外と知らないことに気が付きました。道内外にアピールするだけではなく、地元の人にもっと広めなくてはダメじゃないのか？3月上旬に、登別市観光交流センターヌプルで、登別産の牛肉

やエゾシカ肉を使った創作料理が並んだ「肉フェス」の企画に関わらせてもらいました。市内外の飲食店やまちづくり関係者約70人が来場されました。登別には良いものがあり、それを美味しく調理してくれる人がいる。そして、食べて満足して発信する市民がいるという流れを作っていきたいです。

### SNS発信を精力的に続けていますね

地場産品の生産現場に入れてもらい、そこから消費者に提供するまでを撮影・編集し、1分以内にまとめて発信しています。Instagram、YouTube、X、facebookなど7つのアカウントがあります。生産現場にお邪魔するというのは、一朝一夕では難しいです。まず自己紹介をして、自分を知ってもらいます。どういう目的で誰に向けて情報を出したいかをお話しします。何度も足を運んで、親しくなり信用してもらってやっと取材に入っています。ここは丁寧に行っていきたいです。

### 活動するうえで工夫していることを教えてください

自分を一人でも多くの市民に覚えてもらいたいですね。上下デニムの作業着をユニフォームにしています。「青の上下を着ているお兄ちゃん」というイメージを、お年寄りや農家さん、漁師さんにも持ってもらえるように、この作戦を実行中です。鹿関係の仕事の時には、鹿の帽子をかぶって目立つように頑張っています。『エゾシカのお兄さん』としてのポジショニングも目指しています。

### 鹿に関してもう少し聞かせてください

「半猟半X」を推進したいと考えています。朝晩が狩猟タイムなので、兼業、副業の実現可能性は高いはずです。これは、狩猟者を増やすためにも大事です。農業被害や交通事故などをはじめとしたエゾシカの増え過ぎは、温暖化と共に狩猟者の減少が背景にあります。ただ、駆除に協力してハンターがもらえる金額で

は十分とは言えない現実があります。そこで、報奨金以外のお金を増やすために鹿肉のブランド化、ペットフードへの活用、角を照明や家具などの作品まで昇華して価値を高めていきたいです。骨も出汁やペット用のガムにすることで一層の収益化を図っています。命を頂くという観点からも、鹿のすべてを有効活用することは意義があります。自分がハンターの資格を取る準備中で、さらにお声がけいただき、登別市内の北海道から認定を受けた鹿解体所を引き継ぐことにもなりました。

### 地域おこし協力隊員として大切にしていることは？

自分に割り当てられた要件を満たすことが基本です。それが出来てから、イベントを盛り上げ、結果的に登別全体を経済的にも盛り上げていきたいです。1年目は「種まき」なので、自分が登別を知ることと、一人でも多くの市民に自分を知ってもらうことに力を注ぎました。「増田君、手伝ってよ」と声がかかりだしたときは嬉しかったです。2年目の今は、「芽吹きとプロジェクトを育てる」。イベント企画などに取り組んでいます。そして3年目には「花が咲く」。イベントが2回目3回目になっているはずですが、今活動している登別に定住するためには、実を収穫する必要があります。収益化するフェーズに向かって一つ一つやっています。“未来図”を描いていかないと、定住や仕事にならないですよ。自分がやりたいことが、地域の人に喜んでもらえることなのかを徹底的に考えています。物事には視点があるから、誰にとって嬉しいことなのかを意識しなくてはダメ。そのためには、どんな人が何を考えているのかを知る必要がありますね。

(2024年7月取材)

#### インタビュー後記

登別市で何かを変えたい！と今僕が温めているアイデアは沢山あります。ただ体力には自信ありますが、それだけじゃなかなか進まないし、形にはならない。人脈は移住して1年1か月ではまだまだ…と語る増田さん。いえいえ、ITスキルと抜ぎでた“愛され力”と“あきらめない力”と“行動力”があれば大丈夫ですよ。そして、応援させてくださいね。かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表